

第10章 拡大する教会における祈り⑤



サタンの勢力と向き合う体験をする 予期せぬ反応



サタンの勢力と向き合う体験をする

サタンの勢力に向き合うことが、祈りに真剣になり始める時ではありません。目に見える対決はさほど無いかもしれませんが、戦いはたえず激しく展開しているからです。クリスチャンが祈りのために頭を垂れる時はいつでも、この大いなる戦いと自分がその一部であることを意識しなければならないのです。「**私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです**」(エペソ 6:12)。パウロは祈りの人であり、他のクリスチャンと常に一体となって、共にとりなしの祈りに加わっていた人でした。このような備えがあったからこそ、彼はピリピにおいてサタンの勢力と向き合うために用いられたのでした。

安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。……私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった。彼女はパウロと私たちのあとについて来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」と叫び続けた。幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け」と言った。すると即座に、霊は出て行った。(使徒 16:13,16-18)

「使徒の働き」16章13節と16節は、新約聖書の中で唯一、ギリシア語の「プロス्यूヘー」(祈り)が「祈りの場所」を意味している箇所です。ピリピには、ユダヤ人の成人男性が十人以下と少なく、会堂がありませんでした。そこには、ガンギテス川のほとりに「祈り場」があるだけだったのです。

そこでパウロと同行者たちは、祈りの課題を抱える人たちが定期的に神と出会っていたその場所に赴きました。

今日もそのようにあるべきです。祈りの場所は、神の家であれ、押し入れの中であれ、尊重されるべきであり、求められるべき場所なのです。祈りと礼拝は、天の関心を集めるだけでなく、実に説明のつかない形で、汚れた霊の世界の注目を集め、ざわつかせるものともなるのです。イエスの存在はしばしば、悪霊の反応を引き起こすものとなりました（マタイ 8:28、マルコ 1:23-24、3:11、ルカ 4:41）。ですから、真摯な祈りがなされるところに暗闇の勢力が立ち上がり、戦いを仕掛けてきたとしても、奇異に思うべきではありません。そして、そのような場では、他のどのような場にもまさって、悪の勢力は私たちの祈りに怯え、反応し、打ち負かされるところとなるのです（エペソ 6:12-18 参照）。

パウロの祈りも同様でした。悪霊との対決があり、そして素晴らしい解放がありました。一行が祈りの場に赴くと、悪霊につかれていた一人の若い女奴隷が、この伝道者たちの働きについて叫び声を上げます。聖書によれば、彼女は未来を予知し占いをすることで、自分の所有者のために金銭を稼いでいたとあります。当時の異教徒たちは、そのような人物は何がしかの神の靈感によって真実を語っていると考えていました。現実には、偽りの父（ヨハネ 8:44）からの靈感によって語っていたのです。サタンは、人をさらに巧妙に騙そうとして、頻繁に事の本質を隠そうとします（ヨハネ 10:10 参照）。

聖霊によって整えられ、武装し、祈りを通して新たに力をいただいていたパウロは、最終的に悪霊にこの若い女から離れるように命令し、このことで彼女の主人たちは、彼と仲間のシラスとに怒りを燃やします。真摯に祈る人々ならすぐに気づくように、サタンが実在することは当時も今も変わっていません。しかし、祈る人物には、恐れることは何もありません。「私たちの戦いの武器は、……神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです」（Ⅱコリント 10:4）。

この箇所からもいくつか、祈りについての重要な教訓が学べます。クリスチャンが集まれる祈りの場はとても大切です。祈りは、悪の力を戦いへと引き寄せることがあるかもしれませんが、時には、それらが不思議な形で姿を現すかもしれません。したがって、クリスチャンは御霊に満たされていなければならない、悪の勢力と常に躊躇なく向き合えるように備えができてい必要があります。しかし、神との生きた関係を保っている限り、サタンができることを恐れる必要もありません。サタンに捕らわれた人々は解放されなければなりません。祈りは、その解放のための強力な手段なのです。

予期せぬ反応



悪霊につかれた若い女を解放し、その結果、彼女の主人たちから収入源を奪ったかどで、パウロとシラスは殴

られ、投獄されてしまいます。ところが、彼らはそれでも深夜に「神に祈りつつ賛美の歌を歌って」おり、「ほかの囚人たちも聞き入っていた」（使徒 16:25）とあります。祈る人々の進む先は、常に喜ばしいものとは限りません。祈りは、一切の問題からの免疫を保証してくれるものではないのです。祈りは時として、問題を招いてしまうものであるかのように思われることさえあります。しかし、聖書は私たちを慰めてくれています。「正しい者の悩みは多い。しかし、主はそのすべてから彼を救い出される」（詩篇 34:19）。

神の国に属するしもべたちは、神の国の外にいる人々にとっては不可解な存在となることがあります。深夜、彼らは木の足かせにしっかりとつながれ、背中では傷つき血が流れていました。体は、湿った、おそらくは虫の湧いた地下牢の中で、言い表しようもない不快感に苦しめられていましたが、パウロとシラスは神に祈り、讃美の歌を歌い始めました。場所が魂をきよめるのではなく、魂がその場所をきよめるのです。たとえ苦難のただ中であろうとも、祈る魂の奥底からは、「夜には、ほめ歌を与え」（ヨブ 35:10）という正真正銘の歌が溢れてくるのです。

この二人の献身的な宣教師の祈りの内容がどのようなものであったかについては、何の手がかりも与えられていません。彼らは、ペテロが同様の状況にあった時に奇跡的に解放されたことを思い起こし、自分たちも解放されるように祈ったのでしょうか。あるいは獄吏の回心のために祈ったのでしょうか。その願いと讃美がどのようなものであったにせよ、神は突然に、しかも全く予期せぬ形で、お答えになりました。ペテロの救出のためには天使を送って静かに助けられたのが、パウロとシラスのためには地震を用いられたのです。

神が答えとして送ってくださるものは何でも受け入れますという、信頼して完全に委ねる祈りは、誤った祈りを防いでくれます。神が大きな全体像を見ておられるのに対して、私たちはその詳細のごく一部が見えているに過ぎないからです。どのような状況においても、「みこころが……行われますように」と祈ることが、何にもまさって重要です。このような祈りを捧げる限り、神の働きを制限してしまうことは絶対にありません。むしろ、神がその絶対的な知恵をもって行動してくださる扉を開くものとなるのです。神がもしもパウロとシラスを、ペテロを助けられたのと同じ方法で解放されていたならば、獄吏とその家族が救いを見出すことはなかったことでしょう。

パウロとシラスのこの体験からも、いくつかの教訓を学ぶことができます。闇がこの上ないほど深まった夜でも、祈りと讃美はともに可能であり、また、実を生み出すものとなります。置かれた苦難からの逃避を最高の形で保証していただくためには、私たちの状況のすべてを治めてくださっている主に対して、なさりたいことをなしてくださるように、そして、私たちの解放の結果としての栄光をすべて受けてくださるように求めることです。神が私たちの苦しみに超自然的な形で介入してくださる時には、その意図を見きわめる必要があります。というのも、その答えは、私たちの必要を超えて、他の人々の必要にも届くものとなっていることがよくあるからです。困難な状況にも正しい態度で臨むならば、そういった状況すら、失われた魂に恵みをもたらす手段となる可能性があるのです。